
竜人の人生に平穩はないようです

弩紋合手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜人の人生に平穩はないようです

【Nコード】

N1343U

【作者名】

弩紋合手

【あらすじ】

竜人、即ち竜種と人間の間に出来た子どものこと。さてさて物語の主人公である竜人の少年は次元の狭間を泳ぐのが好きな竜人との間に出来た子どもだったりする。しかもいろんな種族から引つ張りだこになるほど超人気（悪い意味で）。そんな主人公が贈るちよっと変わった日常の物語

俺と親父とお母様

悲しい、悲しい話をしよう。俺は平穩を味わったことがない。もっと言うなら一か月何もなかった日がない。

物心ついてすぐの出来事は親父が力をつけてやると言っていきなり殴りかかってきたことだ。そのすぐ後拳の一部に全身をぶつけて200mぐらい吹っ飛んで気失ったがな。

そんなザ・DVを受け初め早2年、さすがにそんな超絶体験を経験したためか4歳で精神が成熟してしまった。

で、そうなるalmaz最初に疑問に思うことがなぜこないじめにあっているか、だ。

なので、聞いてみると親父はさっさと自立して自分は遊びたいからだと言ってきやがった！普通だったら親子喧嘩でもするとこなんだろうけど、残念ながらまだまだ相手にすらされないだろう。

それにまあ、親父は次元の狭間を泳ぐのが好きだから………理解はできる、納得はしてやらないが………

さて、ここまでの話の中で出てきてない人物がいる。そう、母親だ。

うちの親父は昔無双の力を持つ存在だったそう。そう、『だっ

た』んだよ。

うちのお袋は人間でありながら親父と肩を並べちまったそうだと。つつか勝ったらしい。

元々、他に無関心な親父に勝者特権で俺を『生ませ』て育てさせたそうだと。

だからうちの家はかかあ天下なのだ。

その件のお母様はというと俺が生まれるとすぐに家を出て行ったそうだと。別に親父とケンカしたわけではない。

つつかケンカしたら三界のうち一つは確実に滅びる。

そうではなく、お袋はちよつつつつつつつつマイペースなのだ。なんでも旅行に行くといって三年帰ってこなかったらしい。

その間、つまり俺を親父に育てさせていた間何をしていたかというと親父とケンカ中のオフィスさんとバトってまた勝って『生ませて』きたらしい。

オフィスさんも親父とケンカするだけあって超強い、神竜なんて呼ばれてる。

だが残念ながらお袋よりは強くなかったみたいだ。

後でそんなことをした理由を聞いたことがあったが返ってきたの

は、なんか強そうだったから、だった。

マイペースすぎだろ、お袋

お兄ちゃんだけどブラコン魂さえあれば関係無いよねっ（前書き）

あまり設定が安定していなかったため長らくかかってしまいました。

サブタイは最近好きな某ブラコン小説から頂きました。

お兄ちゃんだけどブロン魂さえあれば関係無いよねっ

俺が三歳の頃一つ下の妹ができた。

表現の仕方がおかしいが実際に俺はそう体験したんだからしょうがない。

なにが言いたいかというと、オフィスさん（一度会ったときにそう呼ぶようになった。）とお袋の間の子どもは女の子っつーことだ。

こういつちゃあなんだが、親父とオフィスさんとの仲は中途半端に悪い。聞いた話をまとめて簡単にすると……………

←
オフィスさんが次元の狭間でお昼寝中

←
親父が入る&追い出す

←
親父遊ぶ↑今ここ

つまり親父がジャイアン、オフィスさんのび太くんだった訳だ。

親父はオフィスさんをきにしてない、しかしオフィスさんは親父を気にしてる（というか怒ってる）。

つまるところオフィスさんの一人相撲になってる状態だ。

オフィスさんも何度が挑んだそうだがことごとく黒星をもらい追い出されたとか：聞いてるとただのこどもの砂場（次元の狭間）の取り合いにしか見えないが、実のところオフィスさんは禍の団とかいうテロ組織に入って、オフィスさんの『蛇』を飲ませてい
るんなところで暴れる手伝いをしてるので他からしたらいい迷惑だろう。

それに時々こっちにも襲ってくるからうざったくてしょうがない。

まあ親父も訳ありっぱいので、オフィスさんには勘弁してほしい。

さて、そんなガキが核兵器を使ってケンカしてるような間柄だが、別におれら子供にはそんなこと知ったことではない……………

現にいつも俺と同じベッドで俺を枕にして寝るしな…

昔はそうでもなかったんだ、というか他人にも俺にも無関心だったんだが……………

だから家から一步も出ないで一日中ただボーッとしてるだけの引きこもり生活を送り続けるのは不味いと思ったお袋が、俺に妹を外に出させるようお願い（という名の絶対命令）してくるのは時間の問題だったんだ。

俺はしょうがなく近所の幼なじみと遊ぶいつもの公園に妹の手を引きながら向かった。

それを何度か続けてるうちに俺とまともに話すようになって、さっき言ってた幼なじみがいざこざで遠くに行った時は離れるのを悲しそうにしていたし、今現在飼ってる猫の親子は妹がうちに持って帰ってお袋にお願いしてきたりと徐々に感情が豊かになっていくことはうれしかったんだが、日が経つにつれ一緒に寝る頻度が増えてきてることに気付いた時、俺は妹が別の意味でダメになっていっ

てる予感をひしひしと感じてたりした。

そういえば最近は猫どももよく一緒に寝るようになったな。

最初の頃は警戒して全然近づこうともしなかったくせに、今じゃ居間でくつろいでると、妹のほうに子猫、俺のほうに母猫が膝の上に乗ってくるほど馴染んでる。

……………ちなみにそういう時は大抵妹が隣でべっつつつつたりくつついてる。

妹よ、早く自立して兄を安心させてくれ

というか、妹に反抗期はくるのだろうか？

……………来ないがする

日常の片隅で・前編・（前書き）

ちょっとしたアクセントで投稿していたデータの一部がぶっ飛んでしまい。少しでも改善などをしました。

初めての会話パートとオリキャラ+原作キャラ&プチ戦闘です。

では、どぞ

日常の片隅で - 前編 -

というわけで俺には個性的な家族がたくさんいるというわけだ。

んん？なんか今宇宙の意志的なものから説明を求められた気がする。

つまり前のあれはうちの家族がどれだけ個性的なメンツかということの説明しただけなんだな。

んで、今は小学校の卒業式の真っ最中なんだが、暇つぶしにちょっと振り返っていたわけだ。

ちなみに、そんなことをした理由は卒業生入場の時、お袋だけでなく親父がいたからだ。……………明らかにボコボコにされた跡があったのは記憶に新しい。大方行きたくないとも言ったんだろう。結果はさっき見たしな

おっ、やっと終わったか。あとは帰るだけだなほとんどの奴らは同じ近くの中学に上がるしたいして……………変わらなくなったな。妹どうしよう。

あいつのことだからマジで中学校に乗り込んできそうだな。それだけはなんとしても阻止しなければ……………

虫も静まる丑三つ時、絶賛真夜中なのだが、俺は起きていた。

というのもし知り合いの情報屋からうちを襲撃するという情報が入ったからだ。

しかも、またらしい。なにがまたかというと……

―回送中―

「『また』禍の団カオス・ブリケードの襲撃ね。」

そういつて彼女、文月ふみつき 白羽しいはは手元にある書類を渡しながら言った。

彼女とは裏関係で俺を調査してる時に俺につかまったやつだ。あとから聞いた話だがつかまるためにあえて気配を絶たなかったとか。

もともと服部家の分家なのだが、俺らを敵にまわすくらいならつかまって取り入ったほうがいいと判断したようだ。

「今回は旧魔王派の悪魔が30人。まあ、そこは別段問題になるようなことじゃないんだけど……その30人とは別に注意していたほうが奴らがいるわ。人数は三人。最近よく合うようになったみたいけど一人一人はそこそこの強さがあるよ。一人目はヴァーリ・ルシファー、旧ルシファーの曾孫にあたる悪魔と人間とのハーフで神器持ち。二人目は美猴びこう。孫悟空の力を受け継ぐ猿の妖怪。仙術を少々嗜んでいる。で、最後はアーサー・ペンドラゴン。アーサー・ペンドラゴンの末裔で聖王剣コールブランドと最近もう一本聖剣をてにいれたらしい。それでここに来る理由だけど、なんか闘いたいんだって。全員デフォルトで戦闘狂バトルマニアだし。と、こんな感じ」

「はあ、相手にする中で戦闘狂が一番疲れんだよなあ……つか、また？」

少し前も英雄の末裔を集めた英雄派とかいうのを相手にしたことがあった。

避けても喜ぶ受けても喜ぶ、殴っても喜ぶで相当ストレスが溜まったんだよなあ、しかもあの曹操とかいうやつがやばかった。人間のままでどこまで行けるか試してみたいとかいつてたが明らかにそれだけじゃなかったし何より不気味だった。襲撃してきた連中で俺が名前を覚えるほど嫌いになったやつはいまんとこあいつらだけだ。本人たちは嬉しそうにしてたが俺は蟻の触角ほども嬉しくない。

「はあ……まあ、しゃあないか。ありがとよ白羽」

「別にいいけどね。こっちは正当なものをビジネスでやってるわけだし……それより今度空いてたら付き合ってくれない？」

「んん？別にかまわないがなにするんだ？」

「デートよデート。というか買い物ね。そろそろ春物の服を買いたいからそれに付き合っただけなの」

「そっいえば俺も服が足りなくなってるんだった。ん、わかった。今週の日曜でいいか？」

「ええ」

——回送終了——

とまあ、こんな感じでまた、奴らの仲間らしきやつが来たのだ。
……… 最後は別の話になってたが、まああいつ（白羽）のことも
おい語る機会があるだろう。

しかし、ああいうマゾどもは今後一切来ないでほしいのだが……
……… まあ、曹操たちも逃げたしまた来るんだろう。鬱だ、死ねる。

まあいい、とつと行つてちゃっちゃんと片づけるか。そう思つて
起き上がると声をかけられた。

「行くのかにゃん？」

「黒歌、起きてたのかお前」

俺の隣には妹が拾つた母猫の黒歌がこつちを見ていた。こいつ拾
ろわれたときは気付かなかったが、猫又という妖怪らしい。

「起きてた、というかクロの上で寝てたのにいきなり起き上がるか
ら起こされたが正しいにゃん」

猫特有の伸びの姿勢を姿勢をしながら答える黒歌。

「知るか、俺の上で寝てるお前が悪い。つかもう一眠りしてろ」

「また布団に入るとき起こされるんにやら起きてるにゃん。という
かそこに連れてつてくれんかにゃ？」

「なにがくれんかにゃ、だ。ダメに決まってるだろうが」

「にゃあにゃあそんなこと言わずにお願いにゃん」

「ダメ、お前に万が一なんかあったら白音になんていえばいいんだよ。却下だ却下」

「なら、見てるだけでもいいにゃ。お願いっ！このとおり！」

そういつて猫のままで前足を合わせてる黒歌。はっきり言って非常にシニールだ。

「はあ、絶対に手を出すなよ？じゃなきゃ2か月はマタタビ酒作ってやんねえからな？」

「そんにやつ！？あんまりにゃ！せめて一週間にしてにゃ！二か月も飲めなかつたら死んじやうにゃ！」

「だ・め・だ！つかお前戦う気満々じゃねえか！やつぱ家にいるこのダメラルー！」

「あんな物取りと一緒にしてほしくないにゃん！！」

「昨日俺のサバを掠め取ったやつが言う台詞じゃないだろ！！」

そんなこんなでギアアギア騒ぎながら目的地である公園まで行くのだった。

「クロデイス・ランスロットだな。我等と一緒に来てもらおう」

「やだ」

公園について早々に悪魔が現れてそう言うてきたので即行で拒否した。多分俺を人質にして……とかだろう。大体このあとの展開も読めてるのでさっさと終わらして帰って寝たい。

「貴様、この人数を相手に勝てると思ってるのか？」

「うん。つかさっさと来いよ。こっちは眠くてしょうがないんだから」

一応全員見てみたがそこまで強いやつはいない。なら前座にはとつとと退場してもらおう。

「我等崇高な悪魔を馬鹿にしたな！？構わんやれ！！」

崇高なとかはどうでもいいが貴重な睡眠時間が減るのはこまる。ただでさえ妹の世話で心労が絶えないというのに……

襲ってくる悪魔達にため息をつきながらまずは後ろの悪魔をぶつと殺した。

ヴァーリ・ルシファー

俺は目の前の光景に冷や汗を掻いていた。

目の前ではいまだにクロデイス・ランスロットが暴れている。一緒に猫も暴れてるが…クロデイスに比べれば目立たない。

茂みに隠れながら奴のことを観察してたが開始そうそうクロデイスの後ろにいた指揮官の悪魔を殺したところをみるとやつは目の前の悪魔が指揮官でないことをわかっていたんだろう。

すでに混乱している間に半分以上が倒されている。

わざとあのバカな悪魔を残してるのも、連携を乱させるためなんだろう。驕りも慢心もなく必要最低限の力で相手を殺してる。

その事実がわかるからか隣的美猴もアーサーも同じような顔をしている。が、それでいてうれしそうだ。

当然か、相手が全力で相手をしてくれるんだ俺らみたいな奴らにとっては非常にありがたいものだからな、俺も嬉しい。

「おい、いつまで隠れてるつもりだ。とつとと出てこい」

とつ、いつの間にか終わっていたみたいだ。

日常の片隅で・前編・（後書き）

本格的な戦闘は次回で…

初めての主人公の名前がでしたねw

く妄想の元く

主人公のネタばれ

初めての主人公の名前がでしたねw

名前はクロデイス・ランスロット

性がランスロットで名前がクロデイスです。愛称はクロで、外見は外人ですが、ずっと日本で暮らしたので同級生のみんなからは頼れるお兄さんのような存在として人気があります。

黒歌のネタばれ

クロは黒歌が姉であることを知りません、母親だと思っているという設定です。そして今の黒歌達は両親と死別し、悪魔に拾われる間の話です。彼女はクロと関わってどう変わって行くのでしょうかね。

オリキャラ文月 白羽のネタばれ

一応ヒロイン候補です。元々忍者の分家の家系です。他にもいろいろありますが今はこんな感じで

今回からちよくちよくこんな感じの簡単なネタばれが入ったりします。

これはクレーム対策もかねてるんですが、どちらかというと皆さんの妄想力を働かせて続きを想像する楽しさを味わってもらいたいです。アドバイスやご指摘はこの作品のためになるものでしたら甘んじて受けるつもりですので遠慮なくどうぞ。

ではまた次の投稿の時にあいましょう

日常の片隅で・後編・（前書き）

休日を使って書き上げました。

あと第三部の一部修正を行いました。

修正が多くてあれですがなにぶん初心者ゆえしょうがないなあという感じで見て貰えるとうれしいです。

今回は本格的な戦闘になります。弩紋合手どもんかっしゅ的には結構頑張った方です。

では、どぞ

日常の片隅で・後編・

最後にあの頭の悪そうな悪魔を殺してて本命の三人を呼んだら結構あっさり出てきたな。というかなぜか三人とも

「にやにやしててきもちわるいにや」

そうなのだ、こいつら三人ともバトルマニア特有のいやゝな笑い方をしてるのだ。

「てか黒歌よ。お前さっき戦ってたよな？」

「（ギクツ！）にや、にゃんのことかにゃん？」

「ほお、そこで惚けるとはいいい度胸してるな、お前。俺の視界に入らないようにしてたみたいだが俺が気付かないわけねえだろうが」

「……………（タラー）」

「今からホントのことを話せば、2ヶ月を1ヶ月に減らしてやろう、
どうだ」

「うつつ私がやりましたにや」

「全く、このバカ猫がカツオせんべい一週間無しな」

「にゃ〜！ひどい仕打ちにゃ！お酒だけでなくおやつまで奪うなんて！」

「俺は他の罰を与えないなんて一言もいってないから」

「ひどい！私との関係は遊びだったのね！？」

「いきなり昼ドラの乗りになってるんじゃない。これ以上騒ぐと二週間を増やすぞ」

「うう、あんまりにや」

猫の姿で頭を抱えるというまたしてもシュールな光景はさておき、

「さて、お前らは英雄派でいいのか？」

「いや、俺たちはあいつらとは違う集まりだが」

「……………マジか、また戦闘狂の集団が増えるのか」

結構マジで凹んだ。これからの生活は大丈夫なんだろうか

「はあ、まあいいや。一応、用件を聞こうか」

「用件は簡単だ。クロデイス・ランスロット、俺達と戦ってくれ」

「別にいいけどよ。こっちとしてはまた挑まれてもめんどいから殺す気で行くぞ？」

殺気を出しながら脅してみるが、案の定と言つべきか顔がさらに嬉しそうなものになつた。頭が痛い。

「そんなことよりはやく始めようぜい！」

我慢出来なくなつたのか、美猴が如意棒で襲いかかってきた。

ちなみに黒歌は既に遠くへほっぽつといた。

如意棒の攻撃はただの縦薙ぎのようなので半歩ずれることでそれをかわし、そのまま突っ込む。前方にいるアーサーがすかさず聖剣で斬りかってくる。だがその太刀筋はあまり鋭くない。

クロデイスは聖剣をはらうように弾き飛ばした。

「仮にも聖剣を、コールブランドを弾きますか！あなたの鱗はっ！」

実はこれは親父からの遺伝で、俺の体表面の皮膚は細胞の一枚一枚に至るまで極小の鱗が張られている。超密度の鱗は一枚がものすごく硬いのに触れば柔らかく斬れば硬いを実現させている。はつきりいってよっぽどの達人でない限り切れることはない。

「くっ！」

コールブランドが意味をなさないので理解したのか、もう一本の聖剣を取り出そうとした。だがその隙を見逃すほど甘くない。

アーサーがエクスカリバー・ルーラを取り出した時、目の前にクロデイスはいなかった。

「どどど…」

「アーサー！後ろだっ！」

後ろに気配を感じたアーサーはとっさに二本の聖剣を盾にした。

が、その後襲ってきた衝撃に意識を投げ飛ばした。

一部始終を見ていたヴァーリと美猴は震え上がった。もちろん武者震いだったが。

アーサーがエクスカリバーを取り出そうとした一瞬クロデイスから意識を外した瞬間を狙って背後に回ったのだ。その後防御の間に合わなかったアーサーを一撃で倒した。言ってることは簡単だがやるとなると非常に難しい。それを目の前で実演されれば否応でもこうなってしまうの当然だった。

「アルビオン、ジャガーノート・ドライブ覇龍で彼を倒せると思うか？」

ヴァーリは自分の神器であり相棒のアルビオンに聞いた。

『今の奴ならば相討ち覚悟でやれば勝てるかもしれないが……奴がそんな時間をくれるとは到底思えん』

ヴァーリと全く同意見だった。既にアーサーがやられた今、美猴一人で相手にするのは明らかに無理だ。それにアルビオンは『今の』といった。ならまだ奥の手が存在するのだろう。

クロデイスの領域にはまだまだ届いてないという事実がわかっていながらヴァーリはやはり笑っていた。隣にいる美猴も同じだ。

そんな二人を見てクロデイスはため息を吐きなくなった。

あの顔は曹操がしていたのと同じ顔だ。やはりこいつらもマゾだったか、と思いながら次にどんな手で来るか考える。特攻を仕掛けてくるだろうか、それとも逃げの一手でくるか。連携をとつての攻撃は来ないだろう。なにせあんなお粗末な攻撃を仕掛けてきたのだから……それだけはあるえない。曹操達は特攻と見せかけて逃げた、ヴァーリ達もそうするだろうか。

頭で素早く思考しながら構えはどちらにも対処できるものにする。

「なあ、ヴァーリ。あいつすげえな」

「ああ」

「今の俺たち達じゃ勝てないな」

「ああ」

「もう少し強くなったら勝てるかもしれないよな？」

「ああ」

「なら、逃げるか？」

「まさか、ここでお預けはないだろ」

「なら、今を全力で楽しまなくっちゃなあ！」

「当たり前だ！」

ヴァーリはこの時ばかりは『真なる白龍神皇』のことなど一切関係なく年相応に遊ぶ子どもの顔だった、と後にアルビオンは語る。

日常の片隅で・後編・（後書き）

なんかヴァーリ達が死んだみたいな描写になってしまったorz

確認ですけど生きてますからね？彼ら。

ここで殺しちゃったら原作的にも後々の展開的にもアウトなので…

（妄想の元）

聖王剣コールブランドのネタばれ

本来であれば聖剣であるコールブランドは防御の上からでも叩つ切れるものですが、それは剣自体が膨大なエネルギーの塊だからです。ではなぜクロは斬れなかったかというと、ぶっちゃけ聖剣よりも膨大なエネルギーを持ってるからなんですよね。まあ元が元ですしね

アーサーとは仲良くなれる気がする（前書き）

休日だからなんとか投稿できてますが。明日からまた不定期になります。

今回は戦闘後の話。相変わらず黒歌は空気のままですがお楽しみにください。

では、どうぞ

アーサーとは仲良くなれる気がする

普通に突っ込んで来た二人を気絶させたあとと同じく気絶している聖剣使いのところに運んだまではいいんだが今非常に扱いに困っている。

というのもヴァーリの神器が………アルビオンというのだが。三人を殺そうしたとき説得というか交渉というか………つまるところ生かして欲しいといってきた。

別にそんなの聞かなくてもよかったのだがこのアルビオン、よほどヴァーリが大事らしく二天龍の名にかけて、とか嘘だったら自分を破壊してくれてかまわない、とかなんとも自己犠牲の精神溢れる奴で、別に殺さなくても後が困るだけにそこまでされると、寝覚めが悪い。

「で、どうする黒歌？」

俺の頭の上でぐっつとしてる黒歌に聞いてみる

「んっ別々に聞いてみる分にはいいんじゃない？本当にこっちに利がある話ならよし、苦し紛れの嘘なら壊すもよしにゃん。まあ、仮にもあの二天龍が言うなら嘘ではないと思うにゃ」

「まあ、それでいいか………つか二天龍って何？」

『なっ！！この白龍皇を知らなんというのか！』

「クロ…それはにやいよ。私でも知ってたのに……」

「知らんものは知らん。結局なんなんだ？その二天龍^{フウレン}つてのは……」

「うーんと、簡単に言つと昔イギリスの方で暴れていた二匹の龍のことにや。強さ的には、神様の次の次くらい？確か神滅具^{ロウギヌス}だったはずにや」

「神滅具^{ロウギヌス}つていうとあれか？曹操が持ってたやつと同じってことか？」

「そうそう、それにや」

「へえ、結構すごいんだな」

確か神器の強力なものをそう呼んだはず……んで神滅具は13個しかないって聞くつまり『神器としては』結構強いことになる。

「つまり今回負けたのはその男がお前を使いこなせてなかったってことか」

「ああ、そのとおりだよ。耳の痛いことにね」

視線を向けてみるとヴァーリが起きていた。

「やっと起きたか、頭をおもいつきり強打したが大丈夫か？」

「まあまあだね。それよりなんで殺さなかったんだい？」

「お前んとこのアルビオンが交渉したいって懇願するもんだから延期してるだけだ。わかったらその二人も起きろや。永遠に寝かせろぞ」

そう言つと二人とも起き出す。

「やはりばれてましたか」

「ははは……いやあ、どのタイミングで起きればいいかわからなくてねい」

隙をうかがっていた、の間違いじゃないかとツツコミたくなつた
が話が進まないのでは何も言わないことにする。

「で、どうなんだ？なんか交渉できそうなのあんのか？」

「うーん、定期的に戦うとかは？」

ガツン！（拳骨の落ちる音）

「~~~~~!!」

「お前らが欲望言つてどうすんだよ、俺に利益がねえじゃねえか。
むしろマイナスだよ。却下」

「美猴……………なにやってんだよ」

「か、軽いジョークだったんだが……………」

「命握られてる状況でよくやりますね。というか心臓に悪いことは
もうやめてくださいね」

「他はねえのか他は」

「うーん、クロデイスは聖剣要りますか？」

「聖剣は使わんからパス」

「後は、お金ですかね」

「そつちも問題ないな」

「アーサーの妹とかは？」

「なに言っただこのバカ猿は」

「ありえませんね。ルフェイを渡すなんて。聖剣の錆びにしますよ」

「ありえんな。家族を渡すやつなんぞクズだ。頭の湧いたバカ猿が」

二人で同じようなことを言った二人はお互いの方を向きガシツツと

熱く手を握った。

「あなたとはいい友人になれそうです。今後もよろしく願います」

「ああ、こちらこそだ。妹を大事にするやつに悪いやつはいねえ」

「あいつらシスコンだったのか。ていうかなんか置いてけぼりにされてるぞヴァーリ」

「そうだね。だが今回はアーサーに感謝だ。おかげで良い交渉の手札を思い付いた」

「おお！なら行動あるのみだ！おい、アーサー！クロデイスー！」

「なんだ猿死にたいのか？」

「なんか扱いが雑になった気が……ってそうじゃなくてヴァーリが交渉したいって」

「ヴァーリが？それでなんだ？」

「ああ、美猴はいいから俺を助けてくれ」

「よし乗った」

「ええええ〜！ちよつ、おまつ！なに俺っち身代わりにしようとしてるんだよ！つかクロDISもなに許可してるんだよ！」

「冗談だ。さて本題だがクロデイス、俺達と友達にならないか？」

「友達？お前らと友達になって俺にどんな得があるんだ？」

「一つはそちらが危険な状況になったときこちらが助けに行くこと。君もまだ最強という訳じゃない。万が一という状況のとき必ず助けに行く。二つ目は情報だな。こちらは禍の団に所属しているからいろいろな情報がくる。それを君に伝えよう。三つ目はこれはまだ先の話だが、君の練習相手になることだ。俺達は必ず君のレベルまで強くなる。そうしたら君をさらに強くする手助けも出来るし、こちらも強くなれる。どうだ？」

「ふむ……」

最後のはむしろ自分達のために俺のためというのは建前だろう。

だが、他の二つは嘘でなければなかない。白羽の情報はかなり正確ではあるが内部からの情報というのもあって損はない。そこら辺はこれからあいつらを視ていけばわかる。

「今言ったことを反故にしないと誓えるか？」

「誓える、白龍皇の名にかけて」

ヴァーリは白龍皇の名をそれなりに大事にしているみたいだからそれを破ることはそうそうないだろう。

「ん、わかった。改めて、クロデイス・ランスロットだ」

すっ、っと手を差し出す。

「ヴァーリ・ルシファアだ。今後ともよろしく頼む」

ヴァーリはその手をしっかりと握って笑っていた。

「なんかバトルアニメの、主人公とライバルが友情を結んだシーンみたいだにゃ」

今の一言で全部台無しだけどな。

アーサーとは仲良くなれる気がする（後書き）

（妄想の元）

クロのネタばれ

もうわかっていていると思いますがクロはシスコンです、隠れシスコンです。

クロには三形態に変身できます。……別にフリーザとかセルじゃありませんよ？

一つ目は人間形態。

見た目は普通に人間と大差ないですけど。細胞壁はチート級。マグマ溜まりで泳げます。

二つ目は竜人形態。

翼とか尻尾とか角とかです。あと鱗っぽいものができる。イメージ的には充電完了したジンオウガとか毛の逆立った猫とか。全体のイメージ的には金色のガッシュに出てくるアシュロンかな？

最後は完全な竜形態。グレートレッドの全長からすると高校3年の頃には80mくらいになる。

アーサーのネタばれ

ここでのアーサーはシスコンです。原作はしらんけどね。

今回はここで終わりです。

いつになるかはさておき、これからの基本イベントはまず黒歌たちですね。そのあとは…なんだっけ？

まあいいや

ではまたお会いしましょう。バイ

クロデイスの休日・前編・（前書き）

申し訳ありません。遅れました。

今日はお母さまvs主人公です。

では、どぞ！

クロデイスの休日 - 前編 -

A・M・05:00

目が覚めるといつものように隣に妹が、上に黒歌がいた。黒歌どかしてそのまま起床。そのまま家の中にある道場に行く。

なぜうちに道場があるかというと、お袋が鍛錬のために武家屋敷を建てたからだ。おかげでうちには使われてない部屋がわんさかある。まあ、お袋の知り合いや、俺の友達が泊まりに来たりするので有効に使わしてもらっているが。

それはさておき、道場に入るとまず柔軟体操を念入りにして、隅にあるサンドバッグに軽く打ち込みをする。しばらくするとお袋が入ってきた。

「おはよう」

「おはよう」

朝の挨拶も早々に道場の真ん中へ……なにが始まるかというと、

これから組手をするのだ。

しかしお袋は胴着姿でいるが俺は半袖と短パンだ。別に胴着を着るのを強制されているわけじゃないし、動きやすい格好でないとお袋との組手はついて行けない。

「さて、今日も始めるか。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

お互いに礼。これは真剣勝負ではないただの組手なのでそこら辺の作法はしっかりする。

お袋が木刀。俺が拳を構える。

「……………」

「……………」

続く静寂の中でお互いに緊張感がどんどん高まっていく。大小の木刀を脱力した状態でお袋は油断なく構えてる。

俺にはまだまだ自分のスタイルが定まっていけないからあそこまで隙をなくすることはできない。

緊張が最高潮に高まったとき、動いたのは……

「——っ!!」

俺………ではなくお袋だった。

短い木刀を持つ腕が僅かに動いたのを見た俺は瞬時に頭を下げた。そのすぐあと頭のあった位地に空を斬る音がした。しかし、お袋の位置は変わってない。

「ふっ！」

さっきまでと変わらない位置で今度は普通の木刀の方が振られる。いや、振られていた。正直剣先どころか刀身自体が早すぎて見えないのだが……また避けた所をなにかが掠める音がする。だが、相変わらずお袋は動いてない。

遠断えんだんという技がある。文字どおり遠くのを断つ（斬る）技だ。お袋は昔外国にあったその遠断を扱う道場の門下生だった。

この遠断は、自分の見た風景を二次元に捉えることでどんなに距離があろうとも関係なく斬ることができる（平たく言うと、相手の写真を撮って、それをカッターで斬りつけるようなもの）というトーンでも理論できています。

これを扱える人間は非常に少ないのだが、お袋にはその才能があった。免許皆伝をあっさり取れたお袋は、道場を継ぐでもなくただその技を次のレベルまで昇華させた。

それがさつき技、三次元遠断というのだが………どういうものかという、自分の正面しか映像として見れないこの技を、自分の死角でもできるようにしたのだ。

今のところ他方向からの遠断を使えるのはお袋とお袋の師匠さんだけ………はつきりいってお袋に説明して貰った内容は全く理解できなかった。道場の門下生達も同じだったらしいがお師匠さんだけはわかったらしい。

お師匠さんも剣術は相当な腕前だがまさかできるとは思ってたのにお袋も大層驚いたそう。

そしてこの物理法則に真っ向からケン力を売ってるような三次元遠断（遠断もか）は非常に凶悪だ。

まず、ガードできない。

なんせガードの下から斬りつけられるから、防ぎようがない。

次にいつでも相手の急所を狙える。

これを真剣でやられればまさに一撃だ。

この技に神器が加わり禁じ手化するともう手がつけられなくなるわけだ。まあ、この話はまたいずれするとして……

そんな末恐ろしい技を今俺は……

避けて 避けて 打って 避けて 避けて 避けて 蹴って 避けて

お袋は接近戦もやばいほど強いからヒットアンドアウェイの戦いしかできない。まあ、決まって最後は……

ガ…………ガガ…………ガガガガガガガガガガガガガガ！！（木刀の当たる音）

滅多打ちされるのがオチだ。

しかし、いやぁほんとに皮膚が堅くてよかった。じゃなけりや今頃撲殺されてるぜ。

目を覚ますと道場の天井が見えた。どうやらいつの間にか気絶してたらしい。隣には黙想しているお袋。上体を起こして俺もそれに倣う。一分ほどしたあとお袋の動く気配がした。俺もそれに倣って起き上がる。

軽く伸びをする。

「お袋、俺どんぐらい寝てたよ」

「二十秒くらいだな。ダメージからの回復が早くなってきた。それにそろそろこの速さにも慣れてきただろう。明日からまた速度を上げるから覚悟しておくように」

「はあ……りょ……かい」

まあ今の言葉からもわかる通り、お袋は俺のちょい上程度で戦ってくれている。速さの上では既に見えないレベルなのだがこのレベルの速さになると相手の身体の動きで予測しないと見切るのは難しいらしい。

俺には既に目で追えない速さだがお袋からしたらまだまだ遅らしい。お袋の全力の一撃を見切れる日はまだ遠そうだ。

「なに、まだこの速さに慣れてないだけだ。慣れてしまえば人の動きがのろく感じるようになる。そうすれば慣れたことになる。安心しろ、お前は確実に強くなってるさ」

その場の空気で察したのか、心を読んだのかは知らないがしっかりとフォロー？が入る。フォロー………なんだよな？そのうち人外になるって言うてるわけじゃないよな、これ？

ってあれ？俺って竜人だからもう人外じゃ……なら大丈夫、なのか？

「さて、もう朝食の時間だ。とつとファイアを起こしてこい。私は朝食の準備をする」

そう言っ出ていってしまった。

「……………俺も行くか」

悩んでも仕方がない。時計を見るともう7時。確かにそろそろ朝食の時間だ。

遅れて夜の扱きが倍になってはかなわん。今日は低血圧な妹をどうやって起こそうか考えながら道場をあとにした。

クロデイスの休日・前編・（後書き）

ついに出てきたね妹ちゃんの名前。いろいろと考えてみたんですけど最後はフィアになりました。名前とか作るの苦手なんです、マジで。

次はほのぼの？むしろいちやいちや日常編です。

（妄想の素）

クロデイス母のネタばれ

まあ主人公の名字で大体察しているでしょう。つまりそういうことです。

ああ、それと神器は別に神滅具ではないですよ？ごく普通の神器です。禁じ手化と彼女の相性がめちゃくちゃよかっただけです。

性格の描写が少ない！というかたすみません。

次回はちゃんとキャラクターが出るように努力しますんで今回は無しでお願いします。

クロデイスの休日・後編・（前書き）

遅くなつてすみません

後編です。では、とぞ

クロデイスの休日 - 後編 -

あのあと、汗をかいた服を着替え妹……フィアを起こしにきたのだがやっぱりというべきか妹はまだ寝ていた。猫達も同じでひたすら寝ていた。

妹は若干不満顔だ。よく見てみると俺の寝ていた位置に手が伸びていた。近づいて頭を撫でてやると今度はにへらぁと聞こえてきそうなおどいしい笑顔になった。

なにこのかわいい生き物。

妹のかわいさを十分堪能してから妹を揺すって起こす。

「おい、起きろフィア。朝だぞ」

しばらく揺すっていると目を覚ました。

「ううん……………あゝお兄ちゃんだ」

そう言いよたつきながらもボスンと俺に抱きついてきた。明らかに寝惚けてる、というかいま正に寝ようとしている。

「って、おい起きろフィア。下でお袋が待ってんだ、早く着替えろ」

「ん〜お兄ちゃん、着替えさせて〜」

フィアは相変わらずの寝惚けたまんまだ。

「……………はあ、わかったよ」

俺はお母さんかと思いながら。ちゃっちゃと着替えさせる。お袋譲りの綺麗な体型になるだろうフィアは、今もすくすく成長して既に胸も膨らみ始めている。着々と女の子から女性に変わって言うてるんだなあと感慨深げに思いながら。だがいかんせん精神的成長はごらんのとおり。本当に兄離れはいつになったらできるのか。先の思いやられる問題にため息がでた。

「はい終わり。さっさといくぞ。白音と黒歌ももう起きろ朝飯の時間だぞ」

「ふああああ、おはようじゃ」

「ふにゃああ……………」

黒歌は起きたが、白音の方はまだ眠そうだ。

「お兄ちゃん抱っこして〜」

こっちは…………ただ甘えてるだけだな。断ると下に降りるのが遅れそうなので仕方なく抱き上げるとえへえ〜と嬉しそうに笑いながら首に腕を回してくる。

いろいろと言いたいことはあったがなんか無駄な気がするので、かわりにはあ、となにかを諦めたようなため息がでた。

下に着くとお袋が朝食を作り終え後は器に注ぐだけとなっていた。フィアを自分の座る場所に着かせ、自分とフィアの分を注ぐ。

「ずいぶん遅かったなクロ。フィアはおはよう」

「あゝ、お母さん。おはよう」

「ごらんのとおり。今日は一段と寝惚けてるんだよ。着替えも自分からしようとしなかったぐらいだからな」

「確かに、今日はずいぶん眠そうだな。さて、いただきます」

そうこうしているうちに食器を並べ終えた。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきますにゃ」

「いただきます」

黙々と食べる俺とお袋。もきゅもきゅと食べる妹。お互いに嫌いなものの交換して食べてる猫姉妹。フィアが静かなため、食事が静か

に進む。前を見てみるとお袋がそれはそれは綺麗な食べ方をしている。お袋の家が礼儀に厳しいわけではなく（むしろすごくフランクだが）、お袋自身が自分に厳しいのだ。

俺達兄妹にはそこまで厳しいことはさせないし、俺達への態度が冷たく感じさせるがお袋なりに俺達を愛してくれているのも知っている。もちろん俺もフィアもお袋のことは好きだ。

そんなお袋は自分にはとても厳しい。主要国家の言語は完璧にマスターしているし、そこでの常識も熟知している。勉強でも大層優秀で、学生時代は基本90〜100点の間をいたりきたりしていて80点代のテストを見たことがあるかないかというレベル。そしてなによりも戦闘では、慢心驕り手抜き侮り視界狭野一切なしという精神で戦闘をする。俺もその精神は受け継いでいるがお袋程のレベルにはまだなっていない。最近俺はお袋が最強と呼ばれるまで至ったのはその異常なまでの精神力のおかげではないかと思っている。

そんなお袋だからかある一点を除けば完璧とっていい。その『一点』が非常に問題なのだが……

「そうそう、一週間後実家の方に行くぞ」

「……………はい？」

「……………（もきゅもきゅ）」

「だから、一週間後実家の方に行くと言ったんだ」

「……………はあ〜」

「どうした？」

さて、もうわかっただろう。うちのお袋には重大な欠点がある。それは、お袋が非常にマイペースなことだ。一番いい例として以前話したお袋は俺を生んですぐの頃の話だ、それ以外にも朝起きたらテーブルの上によっと出かけてくると書いた紙が置いてあって、帰ってきたのは一年後だったり。この武家屋敷だってお袋の気まぐれの産物なのだ。

「お袋よ、そういうことって普通もつと前から言つべきだと思うんだが？」

「うん？それは無理だ、ついさっき決めたんだ。これ以上早くは無理だろう？」

「じゃあ黒歌達はどうすんだよ？」

「そこはほら、本人達が希望するんなら連れてくが？」

「うん。白音って飛行機乗れにゃいんにゃよね……………私も白音を置いて行くなんでできないしお留守番だにゃあ」

「だそぞだぞ？」

「……………もついい」

「そうか？いいならいいが…」

「というかファイア！そろそろ起きろ！」

「んうん……………あれ？お兄ちゃん？なんで私イスに座ってるの？ていつかいつ着替えたの？」

「……………やれやれ」

そのとき俺はSOS団団長にこき使われる団員その一の気持ちを味わった気がした。

食事のあと、今日は五人とも居間でくつろいでいた。俺とお袋はせんべえ片手にテレビを見ている。フィアはいつものように俺の腕に腕を絡めてぴったり引っ付いている。フィアは今キッチンでお茶を淹れてくれているためいないが。すると唐突にお袋が話しかけてきた。

「さっきのフィアのことなんだがな…」

「ああ」

「お前、昨日は夜中外に出ていただろう？」

「そうだけど？」

「フィアはお前が戻ってくる間ずっと起きてたんじゃないのか？」

なるほど、確かに昨日のことを思い返してみるとよく寝返りをうつたりしていた気がする。

「しかしなんでまたそんなことを？」

「なんだかんだであいつも裏側を知る人間だ。お前がそこいらのやつらに負けとも思ってたんじゃないか？」

お前もフィアも兄妹のことになると心配性だからなそう笑いなが言われた。そんなことは神クラスの奴が出てこない限りあり得ないが……俺もフィアが戦っているなんて考えたらたしかに安心して眠れない気がする。俺も大概人のことは言えないようだ。

「まあ、テロしにくるような連中に負けるほど柔な鍛え方をしないし、来た連中は私が毎回力量を測ってるから間違ってもそんなことは起きないけどね」

……訂正、これは遺伝みたいだ。お袋の方がよっぽど心配性だった。

「お兄ちゃん、お茶を持ってきたよ」

フィアが人数分のほうじ茶とお茶菓子を持ってきた。

「?……どうしたの、人の顔をじろじろ見て?」

なんでもないとってお茶をすする。うん、このこおばしい香りがいいな。

フィアは?を浮かべていたが、俺が手招きすると綺麗さっぱり忘れたように普通に隣にきて同じように飲む。左テーブルには黒歌と白音がちびちびと飲んでる。右テーブルにはお袋が菓子食べながらくつろいでいた。親父は………いつも通りだろう。

フィアが寄りかかってきたので頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細めた。それを見て俺は思った。

やっぱり、こういう時間はいい。こんな平穏がいつまでも続けばいいのにと

その後は何をするでもなくまったりと過ごして一日を終えた。

クロデイスの願いはテロが激化の一途を辿っている現在では叶うはずもなく、五年後にはピークに達することをクロデイスは知らない。

クロデイスの休日・後編・（後書き）

フィアの可愛さを出すためにいろいろと勉強したんですが、あまり満足した結果には至りませんでした。（不満）

（妄想の素）

今日はクロデイス達の容姿なんかを入れてみました。

クロデイスのお母さんのプロフィール

髪は金髪（イギリス女性〃金髪という作者の知識不足で決定された）
。身長は170後半でややつり目。いつもどこかに刃物が入ってる
ちよっぴり危険な女の子（自称）

クロデイスのプロフィール

髪はやや赤の多い赤毛。身長は160前半顔は整っていて人気は高い（自称彼の親友談）。クラスの中ではみんなのまとめやく兼兄的位置にいる。

フィアのプロフィール

父親ゆずりの濡れ羽色。身長は150前半。顔はやはりいいためか男子には人気だが、それをプラマイゼロにするほどのブラコン。そのせいか女子からも人気は高い。同じ学校に居れば必ず一度は彼女のブラコンっぷりを見るらしい（さんざん兄とのろけ話を聞かさ

れてきた友人談）。

原作開始まであと5年。クロデイスはリアスや朱乃と同年という設定です。

表と見せかけて裏の話（前書き）

この小説をまっていたかた、ごめんなさい。遅くなりました。

では、どぞ

表と見せかけて裏の話

今日はお袋の実家（海外）に帰る日……………ではなく。

今日は白羽・史華の姉妹と買い物に行く日だ。今は彼女たちを待ってる。

ちなみに妹には彼女達のことは伝えてない。以前、クラスメイトの女子と二人で買い物に行ったことがあるんだが、ついてきた妹が何を思ったのか俺たちの前に来て必殺級の攻撃をしかけてきたことがあったからだ。いや、ホントにあの時は焦った。なんとか被害を出さないようにできたから良かったがその光景をバッチリその女の子に見られたし。あの時はなんとかあったがあんなことはもういやだな。

というわけで、妹に知らせるとどんな化学反応を起こすかわからないから知らせてないのだ。

「おまたせ」

声のしたほうに視線を向けてみると、そこには待ち人が「1人」。

「俺もついさっき来たばかりだから問題ない。数日ぶり、白羽に史

華」

「数日ぶり、あと史華は奥に引っ込んでもらってるから今日は私と二人だけでデートだね」

「そうなのか？」

さて、また宇宙の意思から説明を求められた気がするので答える。文月姉妹は一つの身体に二つの人格がある、いわゆる二重人格のようなものなのだ。しかも深層意識まで潜ればプライベートも守れるというあんともご都合主義な設定まである。まあそれについては後々語れる機会があるだろう。

「そうなの♪だから今日は二人つきりよ」

そう言っ腕をからめてくる白羽。こいつは胸の開いたブラウスにフリルのついたスカート、上にジーンズアウターを着ているという、恥ずかしがり屋の史華はまず着ないだろう格好だ。というか…

……

「おい。当たってるぞ」

「んふふ♪なあに？気になるの？触らせてあげようか？」

なにが嬉しいのかさらにくっついてくる。こいつ、中三のくせに着痩せするのかけっこつ発育がいい。なんというか、腕が埋まりそうな程大きさに、心地よい弾力が……………って」

「そうじゃなくて、歩きづらいだろうが」

「いやいや、ごまかせてないから。さっきの聞こえてたし」

「な、ん……………だと」

「気づいてなかったんだ。まあそれはともかく、早く行きましょ」

少し呆れながら俺の腕を引きながら歩く白羽。……………そんなことよりも……

「クロってよく思ってることが口に出てるよね」

「マジで!?!」

この癖はどうやって直せるんだろうか？

「むー」

「フィーちゃん。そろそろ帰ろうよ。結局普通の買い物だったじゃないか」

私は無駄だとわかっていてもフィアの説得を試みる。

「だめ、女の子と二人っきりで買い物なんて、いつなにが起きるかわからないんだから。私がこうやって見張ってないと…」

はぁ、と予想どおりの答えにまたため息がでる。既にこの問答だって何十回としてる。買い物に出掛けたクロを見て

「女の匂いがする」

と言い出したかと思うと、いきなり頭に白音を頭に乗つけて私の散歩（という名目の尾行）をされると言い出す始末。私本人としては

文月姉妹のことも知っているため、個人的には邪魔の入らないようにしてあげたいのだが……結果はこのとおり。

「だいたい、お兄ちゃんは気が多いんだよ。前だって同じようなことがあったんだよ？あときはまあ、勘違いだったけど……」

前というのは同級生と家庭科でつかう材料の買い物をした時のことだ。あの時もこうやって一緒に着いてったからその日のことはよく覚えてる。なにせあのクロがフィーちゃんに初めて怒った日だからだ。

今は二人が喫茶店に入ったため私と白音は人間の姿になって店に入ることになった。

「そつえばさ、黒歌」

「ん~~~~？」

私はアイスティー、白音は牛乳を飲んでる。まだ冷たい飲み物を飲むには早い気がするけどしょうがない。猫舌だからね。相変わらずクロ達の方に顔を向けながらだけど呼ばれたので生返事で返す。

「黒歌も好きだったよね？お兄ちゃんのこと」

「ブッ！！」

「にゃ～～～！お姉ちゃまきたにゃい」

いきなりの不意討ちに思わず白音の方に吹いちゃった。

「ケホケホッ……ごめんね白音」

相変わらず舌つたらずなしやべり方で可愛かったけど今は自重。
服を拭いてあげる。それにしても白音は可愛いなあ、もうすぐ11
歳になるのにまだ甘えん坊だし（注：自重できてません）、寝ぼけ
てクロに甘えたときなんて気づいてないのか「お姉ちゃん」って今
は全然言ってくれないことを言ったりとか、相手がクロだと気づく
と恥ずかしいのか顔を赤くして逃げたり。白音は可愛いよ、ホン
ト（注：自重できてません）。

「それで、好きなんですよ？」

現実逃避に失敗した。まああれも本心だけど。しかもフィーちゃ

んこつち向いて真剣な目してるし、誤魔化せる雰囲気じゃないね。

「ま、まあクロのことは好きだにや」

「そっか、そうだよな」

はあ〜と深いため息を吐くフィーちゃん。フィーちゃんが本気でクロのことを好きなのは知ってるのでちょっと気まずい。

「でも、今は家族として好きという方が正しいかにや？」

クロに対して恋愛対象としても好きではあるけど、どちらかというと一緒にいて落ち着くとか親愛という意味の方が強い気がする。

「『今は』、ね。あーあ、あーちゃんに続いて黒歌もかあ。お兄ちゃんの周りは強敵ばっかだなあ」

あーちゃんというのはクロとフィーちゃんの幼馴染みのことだ。私達が来る前に引越したらしいので会ったことはないけどなんでも堕天使なんだとか。

「そっという割には嬉しそうだにや？」

「もちろん、強敵が多いとそれだけ燃えるし、なによりそんなか
でお兄ちゃんをメロメロにできたらすごく勝った気がするじゃない
？」

その言葉に一瞬キョトンとするが可笑しくなって笑った。

「フィーちゃん、それじゃまるで熱血マンガの主人公みたいにや」

「確かにね、ふふふっ」

「にゃははっ」

ひとしきり二人で笑い合ったあとのこと

「にゃんの話なのかわからにゃかったんだけど、クロ兄さんもう行
っちゃったけどいいの？」

「うそっ！」

全力で後ろを振り返るフィーちゃん。しかしクロの影も形もない。

「いつぐらいからいなかったの白音？」

「15分ぐらい前から」

15分もあればかなり遠くまで行ける。もう追うのは無理だろう。

「あーあ、店を出ると私にわかるようにしたのになあ」

と拗ねるフィーちゃん。というかどんだけ気合い入ってんだにや

表と見せかけて裏の話（後書き）

当初の予定では白羽姉妹の詳しい説明的な回になるはずだったのに、
いつの間にかスニーキングしていた連中がメインに……

どうしてこうなった。

非常に申し訳ないm()m!!!

元々今年は受験する年で、次の投稿を機に休載しようとは考えてたんですが…

最近、重度のスランプに突入してしまつて指が進まない進まない。ホントに、則巻千兵衛を呼びたくなりました。

このまま行くと最悪11月まで掛かりそうなほど時間がないため、苦渋の決断でしたが今年の投稿は今日を持って終わりにしようと思います。

次の投稿はおそらく私の受験終了後の2月下旬頃だと思われます。

続きを楽しみにしていたかた、お気に入り登録していたかた、そしてこれか読むであろうかた。

次の投稿まで楽しみにしていただけるとありがたいです。

P・S・浪人生は世知辛エ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1343u/>

竜人の人生に平穏はないようです

2011年9月17日19時10分発行